

‘ό κόσμος, ἀλλοίωσις· ό βίος, ὑπόληψις.’

96号 1995.6.11

文・編集・発行

恋 怪子

CD: VAN HALEN 「BALANCE」



ロックンロールバンドって、できたばかりの時メンバたちがやりたいように思いっきりやったのが、「それ以外ない」っていうくらいバランスよくまとまって、それがストレートに伝わってくるということがある。あれこれいじらないで「せーの！」でバーンとやって、それがいちばんいいっていう。VAN HALEN の「BALANCE」にはそれがある。長くやっているバンドならではの風格があるのはもちろんけど、それ以上にできたばかりのみずみずしさとひたむきさが感じられて、まさにロックンロールバンド！

CD: MORRIE 「影の饗宴」



リズムの打ち込みをバックにMORRIEのアコースティック・ギターとヴォーカルがいきている。第一にリズムが気持ちいい。機械音なのに生命をもっている。ところどころにちりばめられたように入っているストリングス(とくにヴァイオリン)やコーラスはひきずりこまれるほどの透明感をもっている。メロディーはありふれたセンチメンタルなポップスのようなところもあるのに、ポップスからはるかに孤高した美しさには息をのむほど。そして、歌詞のすばらしさ。

「君の頭に針を打ち込む／浅い刹那に満ちた日々／君が溺れて死ぬことができる／深い海など何処にも無い」(「一瞬だったら」)
「冬がくる／あなた一杯に／がらんどう／あなた一杯に」(「猿の夢」)
「黙って叫んでる／あなたの涙らさを／天の窓か

サミー・ヘイガーのヴォーカル、貴様のあるしわがれ声なのに、新人のような初々しさで思いっきり歌っていて心うたれる。シンプルでストレートな歌詞も、深い人生観に裏打ちされているからだろう、聴きごたえがある(「Can't Stop Loving You」と 'Not Enough"のバラードの2曲がとくに)。

ギターのエディー・ヴァン・ヘイレンは、ともすればスーパー・ギリストということで語られることが多いけれど、このアルバムではそういう面が目立たず、サミー・ヘイガーのヴォーカルをとてもよいかしたギター・プレイがすばらしい。もちろん随所でスーパー・ギター・プレイを聞くことができるし、インストゥルメンタルの曲もちゃんと2曲はいっていて、それもとてもいいけれど、全体にジャンジャーンというシンプルでパワフルなロックンロール！っていうギターが楽しい。"Big fat Money"はギンギンにロックンロールしてるし、"Take me Back"のアコースティック・ギターもいい。

そしてなによりアレックス・ヴァン・ヘイレンの刻むドラムのズンズンという重いひびきが、速い曲でも遅い曲でもいきいててすばらしい。ヴォーカルもギターもそのがっしりとしたドラムという土台の上だからこそ、思いきりやれる。

さすがだ。

VAN HALEN をまともに聴くのはこの「BALANCE」が初めてで、これまでの「VAN HALEN」(1978年)と「1984」(1983年)を借りて聴いてみた(THANKS:MOB)。デヴィッド・リー・ロスよりもサミー・ヘイガーのヴォーカルのほうが歌に思いがこめられていて好きだな。

ら覗き／笑う／あなたに／届けと／高らかに」
(「沈黙の秘密」)

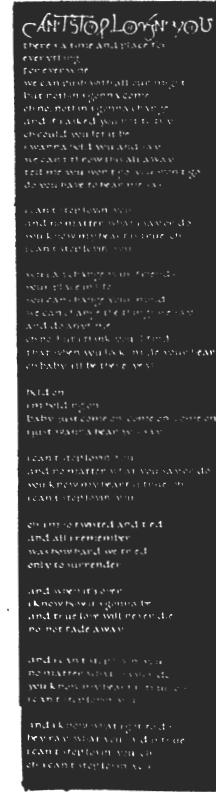
「友を探して／沙漠の果てまで／猿と豚を／追い詰める」「見つけた友は／自分を知りすぎ／首をくくり／ああ 摘れる」(「壊す人」)

比喩が比喩を超えて実体となり、MORRIE独自の宇宙を創世する。美しいけれども前にすぎず、"引っ込み思案"といった趣のある演奏をバックにして、以前にも増して透明なMORRIEのヴォーカルでこういう歌詞が歌われるのを聽くと、後頭部からさうーっと血の気がなくなっていくのが実感する。そして、意識だけはどんどん覺醒していく。自分は「猿や豚」で、それをMORRIEが笑いながら「天の窓から覗く」いている……。

覚醒もきわまれば夢幻に通じる。「影の饗宴」のMORRIEはそのくらい覚醒している。

一月末の発売以来ずっとVAN HALEN の「BALANCE」ばかり聴いていて、そのあとに聴いたのがこの「影の饗宴」で、それから10日間くらい「影の饗宴」ばかり聴いたあとでまた「BALANCE」を聴いてみたら、MORRIEは現在の私にはどうやら内閉の働きをするらしいということがわかった。

MORRIEはどんな意味でも決して“閉じて”はいないんだけど、聴いている私の方がMORRIE独自の宇宙に“閉じこもって”しまうのだ。この世で生きているということ、それは他人との関係ということでもあるけれど、その感覚がなくなって“自己完結”できる。それが気持ちいい。でも、「影の饗宴」のあとで「BALANCE」を聴くと、「あ、いままで気を失っていたのかな？」って思われる。自分で内側から閉じていたドアがバーンと開かれ、心臓がドッキンドッキンし、一気に肉体感がもどってくる。まさしく“血沸き肉踊る”。“自己完結”は消え失せて、他人との関係がよびさまされる。共感というのは、他人と自分とのつながり=関係、を感情で(心臓でとい



った方がいいかもしれない)実感することなのだというあたりまえのことを、初めて知ったみたいな新鮮な気分になる。

血の気がなくなるのもいい、血沸き肉踊るのもいい。

一瞬だったら

君の心に浮かんぐるのは
遠い昔の亡霊
君の耳元 吐息を吐いて
気持ち良いから済し崩し

あああ また見た あなたの唇の影
街を歩けば誰彼構わず
脇まで透けて あああ楽し
夢も潘れます今宵の風に
ありもしない傷が疼く

一瞬だったらいいける
どんなとこにも
一瞬だったらなれる
どんなものにでも
一瞬だったらできる
どんなことでも
一瞬だったら君の
君を愛せるか?

あああ その前に
君が脱ぎ捨てた君の抜け殻
空の上から引きさり下ろして
ためつさめつ眺めてみるなら
一瞬の夢は余りに永い

あああ また見た あなたの唇の影
君の頭に針を打ち込む
涙の刹那に満ちた日々
君が溺れて死ぬことができる
深い海など何處にも無い

一瞬だったらいいける
どんなとこにも
一瞬だったらなれる
どんなものにでも
一瞬だったらできる
どんなことでも
一瞬だったら君の
君を愛せるか?

あああ その時に
あああ また見た あなたの唇の影
君の頭に針を打ち込む
涙の刹那に満ちた日々
君が溺れて死ぬことができる
深い海など何處にも無い

壊す人

わたしの名前は
孤独といいます
夢の国で
さああ 遊ぶ

道無き道は
望遠と呼ばれて
可愛いあの娘
忘み嫌う

友を探して
沙漠の果てまで
猿と豚を
追いかける

出会ったものは
わたしの肌だけ
生きかず殺す
ああ 同じ

見て 見て
壊せや壊せ
見て 見て
笑えや笑え

余りに無邪氣な
少女の群れは
氷の国で
吊される

星の垂らした
よだれを滴げて
可愛いあの娘
気がふれる

見つけた友は
自分を知りすぎ
首をくぐり
ああ 握れる

出会ったものは
誰かの肌だけ
今もどこかで
泣いている

見て 見て
壊せや壊せ
見て 見て
笑えや笑え